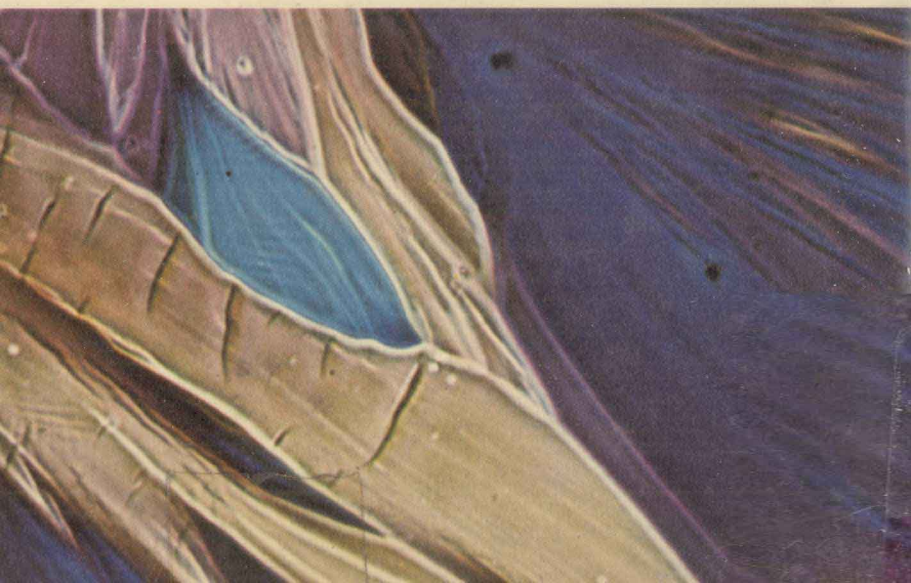
死

私のアンソロジー 7

編集
解説 松田道雄



私のアンソロジー 7

死

編集・解説

松田道雄

筑摩書房

私のアンソロジー　7

死　編集・解説／松田道雄

編者略歴

松田道雄（まつだ・みちお）
1908年茨城県に生まれる。1932年京都大学医学部を卒業。初め困窮者の結核治療にあたり，戦後は開業医として幼児の治療にあたる一方，知識人のあり方やロシア革命に関する評論を発表。現在は著述に専念している。
（著書）「私は赤ちゃん」「君たちの天分を生かそう」「日本知識人の思想」「ロシアの革命」「革命と市民的自由」「恋愛なんかやめておけ」「われらいかに死すべきか」等。

1972年3月18日　初版第1刷発行

発行者　竹之内静雄

発行所　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
振替東京 4123　Tel. 291-7651
郵便番号 101-91

©1972　第7回配本　装幀／中島かほる
三松堂印刷・永興舎製本
1395-03307-4604

目次

I　さまざまの死

月白の道（抄）　丸山　豊　3

おんなごころ　井伏鱒二　15

死の床にて　久保山愛吉　29

遺言・最後の遺書　由比忠之進　33

死の幻影　小林　勝　35

別　離　池本光子　45

さようなら　ありがとう　みんな　朝山新一　58

死者の視野にあるもの　高橋和巳　74

青春と死について　長田　弘　87

II　生と死との間
死者と生者　伊藤　整　99
生と死の谷間を歩いて　椎名麟三　111
オイゲン・ヴィンクラー　本野亨一　123
麻薬・自殺・宗教　坂口安吾　144
死者との対話　見田宗介　157
人間をささえるもの　武田泰淳　169

III　安楽死
安楽死の新しい解釈とその合法化　太田典礼　181
安楽往生　本多秋五　194

IV　死にかんする論議
心願の国　原民喜　199
敵と味方　埴谷雄高　206

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

「難死」の思想　小田実　218
戦中派・その罪責と矜恃　安田武　243
夏日随想　中野好夫　263
何ものでもない存在から　一色真理　273
焼身抗議の論理　橋本峰雄　280
観念的な〝文学死〟　司馬遼太郎　285
閉じ込められなかったエロス　なだいなだ　289
失われたユートピア　山田稔　300
*
対話ふうの解説　なんにもなくったっていい　松田道雄　317
著者略歴　345

I

さまざまの死

月白の道（抄）——丸山豊

酔いのいましめ

私たちが水上園下にひきいられて、二十倍の敵軍にかこまれた北ビルマのミイトキーナへ出発したのは昭和十九年五月。八月三日にはミイトキーナ守備三千名のほとんど全部が戦死、雲南省は十五倍の敵をむかえて、九月七日には、怒江にのぞんだラモウ陣地の六百五十名全員戦死、ひきつづき九月十四日には、トウエッ守備隊の千六百名が全員戦死した。この仏の数のなかに、多くの友人や、心を通わせ合った部下たちの死が、たたみこまれている。

トウエッ守備隊にいて、奇しくも命ながらえた二十数名のひとり吉野孝公君が訪れて、つい先ほどまで、戦地の風物や戦死した友人について、話しこんでいった。戦後の二十年あまりを、おたがいにくりかえし、飽きることなく語り合った話題なので、いまさらくわしく述べる必要はない。「白いパゴダが……」「火祭りの踊り子……」「自決……」「大トカゲは……」「公路の霧……」「ボーイングB……」などと、ぽつりとなじみの主語をもちだせば、それにつづく万感は語らずとも胸を通じ合うのである。だから、ぽつりぽつりと話しながら、ほおはあからみ眼は熱気にかがやいてくる。もともと私たちの回想は美化しやすいうえに、戦場は青春の一切を賭けたところ。戦友たちと戦地の談話をするときに、かならず情緒が熱をもつ。ひとつの「酔い」である。

ところで、いまこの随筆をしたためながらも、とかく一種の酔い心地がおそってくるをおそれる。会話であれ文章であれ、そこに酔いがなければぴちぴちしたはずみがおこらぬが、酔いがすぎればついひとりよがり。酔いと同時にひえびえとした醒めをもたねばならない。悟性

の醒めが、紅さした酔いにひきたてられていよいよ深く醒め、情緒的な酔いが、醒めの蒼白によって意味のあるたかぶりに変わるようにしたい。それは市民のなかの市民であり、常識にとりまかれた世界に住む私たちが、生きる意味をたかめる心の操作である。そこから、普通の生き方をしながら、普通の生き方の悪と矛盾をみずからえぐりだしてゆく方法がうまれる。

私たちはじぶんの声の質にふさわしく発言すればよいし、じぶんの脚力に応じてあるいてゆけばよい。じぶんの褌力が、ひとよりすぐれたものであるなどと、思いあがらぬがよい。世のなかをシニカルにながめる前に、まっすぐに見ることをおぼえよう。反俗のために反俗になったり、変形のために変形したりするのを避けよう。否定のつよさよりももっとつよい視力で、真正面から世の中を見つめているうちに、おもむろに生の奥義が透けてくるのを信じたい。

私は、戦いのある日ある時の真相を書こうとしているのでもなければ、声高く私じしんの汚れた手を告発しようとするのでもない。この随筆は一種の酔いをおさえながら、戦時から今にいたるまで、鎮魂のねがいをこめて、醒めつづけ痛みつづける胸奥の覚えがきである。

低い声

敵はつぎつぎに、あたらしい火器をくりだしてくる。重さが五トンもある何やらむずかしい名前のついた曲射砲。たぶん短延期という漢字をあてるのだろうが、爆発力のつよいタンエンキ爆弾。被爆したら体がただれて、死後いく日も燐の光がたちのぼるという黄燐弾。しとしとと雨降りつづく陣地の夜、こちらのタコツボでは生きた兵隊が死の順番を待ち、むこうのタコツボでは、燐をかぶった戦友のむくろが腐敗したまま青白い光をはなっている凄絶（せいぜつ）を想像してください。

守備隊にきた命令が死守であろうとなかろうと、もはや兵隊は死が待ちきれないのである。むこうから近づいてくる死を待つよりは、ひと思いに死へとびこみたい。湿気と痛みと飢えのはてになしくずしの腐敗があって、そこから逃げるたったひとつの方法は、いさぎよい死である。死で死の苦痛をのりこえたいのである。はやく死なせてくれ、思いきって突撃させてくれと、兵隊は小隊長に申しでる。小隊長は中隊長へ、中隊長は大隊長へ懇（こん）

望するのだ。ミイトキーナ守備隊は、十五倍をこえる敵兵力を一日もながくひきつけておいて、後方の陣地構築の時間をかせいでやるという、体裁のいい名目にしばられている。その美名をまっとうするには、はやる心をおさえなければならない。これでもまだ気がふれないのかと、まるで拷問のように、ゆっくりした速度でせまってくる死。そして、ついに耐えきれずに敵の銃口の正面へとびこんでいった兵隊と、文字どおり一所懸命、じぶんのタコツボで腐敗していった兵隊。かれらがぐっとのどのおくにのみこんだままの絶叫をきくがよい。

敵も勇気をしめすことがあった。ある晩は二百名の敵兵が、日本のやり方をまねて、死を決した夜襲をこころみたそうである。情報をかくす意味で、階級や氏名をしるしたノートや布片や写真など何ひとつたずさえず、ひとつの肉体と一ふりのジャック・ナイフと一冊の聖書をもって、わが守備陣地におそいかかったそうだ。

愛憎の日々を遠くへだてれば、いずれも命がけでじぶんの最善をつくしたもの、日本の兵隊のこれが美しければ、米人のあれも雄々しく美しい。あれがむなしければ、これも無上のむなしさである。

死者たちは、人間としての最高のエネルギーを表現して、獣のようにみじめに死んだ。習慣は、かれらを英霊とか神とか呼ぶが、その美しい名でかれらを、ひえびえとした祭壇にさらす前に、かれらはいつも人間であり、ついにりっぱな人間であったことを心にきざみたいものである。耳をすませば二十五年を経過したいまも、かれらの人間をあかしする低いうめき声がきこえてくる。まだ戦争はおわっていないのだ。

軍神

兄弟部隊である菊と竜は、いずれも世界最強の部隊であるとみずから信じていた。空からおちてくる敵のビラは「竜のウロコはいまや剝落、菊の花びらも枯れてゆく」と書いていた。戦闘に勝って戦争にやぶれるくちおしさ。清香をはなっていた大輪の菊がしぼむように、守備の輪はしだいにちぢんでゆく。私たちの壕から西の第一線までのへだたりは、わずか七百メートルにくびれてきた。一個小隊いまは三名というところもあれば、とっくに全滅した中隊もあった。

軍の司令官からも師団長からも、膚ざわりのよい電報

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

がきた。

ゴ奮戦ヲ謝ス。一日タリトモ長ク死守サレタシ。

あるいは、

一粒ノ米、一発ノ弾薬モ送ルコトナクテ貴隊ノ玉砕ヲ見ルハ誠ニ断腸ノ思ヒナリ。サレド光輝アル皇軍ノ伝統ト九州男児ノ面目ヲカケテ最後ヲ全ウサレンコトヲ切望ス。

トウエッにのこした私たちの留守部隊からは、心のこもったさようならの通信をうけた。こうした受信のなかで、水上閣下の心にひらめくものを、さだかにとらえるのはむずかしい。閣下のいくつかの言葉をひろってみて、そこから思いはかる以外には方法がない。

ぽつんと漏らされた言葉、「勝つことのみを知って、負けるを知らぬ軍隊はきけんだよ。孫子も言ってるようにね」

執行主計と私とふたりだけに、さりげない調子で申された言葉、「執行大尉と丸山中尉、私がいるかぎり決してふたりを死なせはしませんよ」

「なにをおっしゃるのですか」と私たちが反問したときには、もうそっぽをむいて、聞こえぬふりをしておられた。

司令部付の五、六名の将校と当番兵がいるときに、「みんなの体は、それぞれがご両親のいつくしみをうけて育ちあがった貴重なもの、これを大切にとりあつかわぬ国はほろびます」

戦死近しと見て、南方総軍司令官からか、あるいはもう一段上部から、暗号電報がきた。

貴官ヲ二階級特進セシム。

水上大将という栄光のうしろにある、さむざむとしたものを閣下は見ぬいておられた。閣下の心の底で、ある決断のオノがふり下された。「妙な香典がとどきましたね」と、にっこりされた。二日後に、また電報がとどいた。

貴官ヲ以後軍神と称セシム。

軍神の成立の手のうちが見えるというものである。閣下はこんども微苦笑された、「へんな弔辞がとどきましたね」。名誉ですとか武人の本懐ですとかいう、しらじらしい言葉はなかった。私たちが信じてきたとおりの閣下であった。この閣下となら、おなじ場所、おなじ時刻に悔いなく死んでゆけると思った。なるべくかるい気持

で死のうと思った。

安死術

前の章で、水上閣下を大将に特進させるという電信の直前に、軍からあらためてもう一回、死守せよとのだめおしがきたのを書き忘れていた。その電文は、前日にくらべて微妙な変化をみせていた。記憶をたどれば、

貴官ハミイトキーナ付近ニアリテ……死守スベシ。

前回は「ミイトキーナ」であったものが、こんどはなぜ「ミイトキーナ付近」と変わっていたのであろうか。閣下も首をかしげられて、「付近だな、まちがいないな」と、念をおされた。防衛庁防衛研修所戦史室が出版した『イラワジ会戦』でも、このへんに疑問をなげかけている。もうひとつおかしい点がある。死守すべきはなぜ「水上少将」個人であって、「水上部隊」でなかったのか。それは軍の参謀たちの温情であるのか、浅慮であるのか、それともためらいであろうか。一流のずるさであろうか。

全員戦死も近いと思われる、色めき立ったある日の昼さがり、香月衛生軍曹をつれて連隊本部へ連絡にいったかえり、爆弾の落下音がざわざわと頭上にせまってくるので、あわててもよりの防空壕にとびこんだ。ふたりの体が壕のくらやみにころげこんだとたん、はげしい地鳴りがして壕がつぶれた。肩の先でもがきながら、じっと眼をこらすと、ひとところだけうっすらとあかるい。自由のきく右の手でねばっこい土をかき、ものの十分も掘りすすんだとき、ぽっかりまぶしい世界がひらけた。しめった泥の国から体がなかばぬけだして、さしのべた手の指に負傷兵の軍靴がさわった。

壕の口でたおれているのは、司令部の顔なじみの通信兵である。はね上がった爆弾の破片が、右の太ももをぶっつり切断しているかのように見えたが、だきあげると、皮膚と肉のぐにゃぐにゃしたつながりが残っている。香月軍曹がかれを背負い、私が下肢をかかえて、とりあえず崩壊した司令部宿舎のたたきまではこんだ。ここでいま私がもっている衛生材料をかぞえるなら、聴診器がひとつ、雑用のハサミが一個、木綿針が一本、敵の物資投下の落下傘からほぐした糸がすこし、閣下からホウタイがわりにでもといただいた閣下用の蚊帳が一はり。蚊帳の耳で止血帯をほどこし、ハサミでつながりを断ち、創

面には蚊帳をあて、私の最善の治療はおわる。あとは、砲火にさらされたたたきで、なりゆきを待つだけである。

いったん壕にかくれた私と軍曹は、かわりばんこに壕をでて通信兵の容体をうかがうのだが、砂をかぶった顔は苦痛にゆがみ、「はやく死なせてください」を、うめくようにくりかえしている。あす、あさって、かれがどういう運命をえらべるというのだろう。いずれかれも死に、私も死に、みんなも死ぬ。思いあまったあげく、私はかれの止血帯をほどいてやった。すでに息もたえだえであったのだが……。

幻　は

死守の命令がきていることは、水上閣下をのぞけば私たち六名だけが心にたたんでいた。連隊長にどの程度知らせてあったかは、私は知らない。第一線の兵はなにも知らされていないが、あるいはとの懸念がひらめいたのはたしかであろう。死をえらぶことと死を待つこととのへだたりの大きさ、辛酸をなめた第一線には、死を待つよりも、みずからえらばせたいとの閣下の意向であった。そして今から思えば、しかもなお生きのこったものには、生へのかけはしを用意しようとの、閣下の配慮がうごいたのだ。閣下の人間性が壮烈にしぶきはじめたのだ。

私たち側近は、閣下にしたがっての最期を待った。そのとき眠るようにしずかに死ぬために、心のコントロールに力をつくした。したしく教えをうけた禅家、沢木興道師の言葉などが強烈によみがえってきた。そのときの私の、いつわりなき心情がどうであったかということは、私の生の終局と最初とがばったりひとつになった重要な体験として、その後の私の人生の、思考や行動のゆるがしがたい根となるようである。率直にいって、私の心を占めたのは、りくつっぽい思考よりも、重いとかかるいとか、あさいとか深いとか、ねばっこいとかさらりとしているとか、そんな物理的な言葉がはじめて表現できるものであった。自由はいいなあ、身がるでいいなあ、生きるということはいいなあ、あかるくていいなあ、と思った。

なぜか私は、久留米の樹木の多い町を思いうかべた。心象はだんだんしぼれて、チンチン電車の電車みちに沿う日吉神社の風景をえがいていた。それが高良神社でも水天宮でもなかったのは、そこが私の零歳から三歳まで

の住居の氏神さまであり、子守りの監視をうけながら砂いじりや日向ぼっこをしたお宮であるからにちがいない。心象はもっともせまくなった。拝殿の床下のうすくらがりでうごめいている乞食の思いでをたぐっていた。あの非人はいいなあ、日に一、二回はたっぷり御飯にありつけて、敵がせめてくる心配もなく、嵐にぬれる懸念もなく、眠りたいだけ眠りこけることができる。ああ、非人になりたいなあ、とそんな情ない願望が心をとらえていた。富貴栄達なにものぞ。普通に生きるということのありがたさ。

じぶんの最期の声をかたちにしたいと考えた。もともと、すべての文学は遺言である。しかしきょうは、文学という心がまえをふりすてて、遺言という重くるしさもふりすてて、獄のかべに死刑囚が落書をのこすように、俳句をまとめてみたいと思った。そしてどうやら一句ができた。まだどこかにてらいがひそむのは、若さのせいであろう。

まぼろしはますみのそらのあきつかな

あきつは、トンボのことであり、あきつ島のことである。なぜか平仮名がなつかしくて、十七字すべて平仮名でしたためたい俳句であった。

幽霊たちの旅

水びたしの壕のなかで。

——おれたち、もうすぐ自由になるぞ。水上閣下をまんなかにおいて、肩をくんでかえろ。

——日本を出てもう三年にちかい。りっぱにつとめは果たしたもんな。肩の荷を降ろすような気持ちだ。

——おれ、あのひろい青い海をするするとささ舟でかえりたい。

——おれは浮き身をしてゆく。重さがないんだもん。

——閣下、トウエッにはぜひ立ちよりましょう。あのヒョコがどんなに大きくなったことか。留守部隊の三佐少佐や仲中尉、鶏舎をほったらかしにしているかもしれん。

——ラングーンでは、黄金パゴダのとっぺんにも上がってみたい。

——ヒゲをそりたいな。だが、死んだらヒゲはないのかな。

——吉開中尉、黒でカクテルをつくって。うふふ。

——おれは腹いっぱい砂糖をなめてみたいな。
——閣下、たき火で手をあたためながらやきいもをかじるのもよかですね。
——高菜をそえたお茶漬けもいい。そういえば、肥後の高菜と、筑後の高菜と、どこが違うか知ってるかい。
——閣下は結婚のとき、ロマンスがあったのですか。
——青い海の上を、まっさおに染んだおれたちの霊魂がどんどん急ぐ。あらしがきてもへいちゃらだ。
——星座のよみ方をもっとべんきょうしとけばよかった。
——もう遅か遅か。しかしちゃんと帰巣力がそなわるはずじゃ。
——関門の山が見えてくる。日和山、源平山、測候所……。連絡船がうごいている。
——おれたちはみんな九州ゆき。気まぐれに汽車へのりこむ。閣下は甲州ですね。一べん東京に立ちよられますか、ぶっつけ甲州ゆきですか。甲州の木の芽田楽がなつかしかでしょう。
——おれ久留米にかえりついたら温石湯へゆく。平凡この上なしの谷間の湯だ。ぬるぬるした湯ぶねにつかって、あの世の詩歌をつくる。
——おれはな、風流祭りの太鼓を思うぞんぶんたたいてみたい。
——筑後川を、水源から河口まで気ままに下ってみるのもいいな。
——おれが生きていたときの名前を、だれがどんなふうに呼ぶか。おもしろいぞ。
——わるい趣味だ、やめろやめろ、もっと達観せにゃ。せっかく死んだのだもん。
——ところで、きょうはもう七月三十日だね。よう降りつづく雨じゃ。

彼岸

かねて兵隊ひとりの一日の発射を六発までとおさえていたが、その小銃弾もいよいよ残りすくなく、食べものもすっかり尽きはてた。守備隊の背水の陣はだれの目にも二、三日の命脈と見えた八月一日、水上閣下から全軍にイラワジ対岸への撤退の命令がくだった。夕方から書類や軍票をやきすて、じぶんのナンバーを刻んである認識票も土にうめた。閣下のおもわくはいざ知らず、私た

ちは、「ミイトキーナ死守」が「ミイトキーナ付近で死守」にかわっただけのことで、たぶん五日か六日死のときが遅れるのだと考えた。

それにつけても苦慮の焦点のひとつは、重傷者の処理である。イカダによるイラワジ下航のむずかしさはさきに述べたが、それでもこれまでにいく組かのイカダがながれにのって下っていった。しかし、そのすべてが途中で行方不明になっている。思者処理について、閣下の下問に私がなんと答えたかはっきり記憶していないが、たぶん非情の方法のみといったようである。閣下の命令にしたがって、野戦病院では、重傷者の始末がおこなわれたそうである。イカダを組めるものはイカダを組んだにちがいない。一発の手りゅう弾の上に何人も体を重ねあって最期をいそいだものもあろう。しかし、もっとすさまじい方法も、昇こう水とメスを使用して、斎藤軍医(八幡)たちの涙のうちに実行されたはずである。斎藤軍医は「みな従容として死にました」と、報告した。従容の内容は百人百様であったろうが。

照明弾やえい光弾のためか、それとも雲間をくぐる月のはやさのためか、あかるくなったり暗くなったりする泥んこのみちを、閣下のともをしてイラワジ河岸までかけぬけ、小さな崖をぴょんととびおりると、そこにはすでに舟が待機していた。影絵のような数そうの舟が近づいてくるのは、もどり舟であろう。仏典の言葉、あの彼岸へわたろう。海のようにひろい夜の大河を、私たちのオシの舟は、オシの人間をのせてしずかにこぎでてゆく。二十分あるいは三十分ぐらいで、ノンタロウ中洲の浅瀬へのりあげた。ここから徒渡りして河岸のみちへたどりつき、南へあるいて灌木林のなかで夜あけをまった。

重くるしい朝がきた。夜じゅう聞こえていた市街の砲声が朝になるといっそうはげしくなった。渡河の意図を感づかれたのではあるまいか。ゆうべ、そして今夜と、手はずのとおり順序よく渡河がはかどるだろうか。こまかい雨がふっていた。私は香月軍曹をつれて、チークに似た樹木にもたれていた。しげみのなかでときどき単発の銃声がしたり、手りゅう弾がはじける音がした。たぶん、ここでも自決をえらぶ兵隊がいるのだろう。じぶんの気力と体力の限界を、もうこのあたりまでと見きわめて……。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo